様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　22　年　4　月　17　日現在

研究種目：　基盤研究(C)
研究期間：　2005～2008
課題番号：　１７５２０３９９
研究課題名（和文）アジアの地域協力による非仏語圏におけるフランス語教育振興策の研究

研究課題名（英文）Study on the Promotion Politics of French Teaching in the Non-Francophone Zone through Regional Cooperation in Asia

研究代表者
三浦　信孝(MIURA NOBUTAKA)
中央大学・文学部・教授
研究者番号：１０１３５２３８

研究成果の概要：　三浦が 2004 年 7 月に国際フランス語教授連合 FIPF アジア太平洋委員会委員長になったのを契機に申請した研究課題である。台湾、インドネシア、ヴェトナムの同僚を研究協力者に、日本、タイ、台湾、パリ,などで開かれる国際学会で研究交流を積み重ねた。かつてフランスの植民地だったヴェトナムやインド洋のレユニオン、モーリシャス、南太平洋のニューカレドニアを旅行しフランス語の使用状況について調査した。研究成果は研究課題に直接間接にかかわる多くの論文にまとめて発表した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2005 年度	1,100,000	0	1,100,000
2006 年度	800,000	0	800,000
2007 年度	800,000	240,000	1,040,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総　計	3,500,000	480,000	3,980,000

研究分野：外国語教育
科研費の分科・細目：　言語学・外国語教育
キーワード：　フランコフォニー、非仏語圏、アジア地域、フランス語教育、言語政策、比較文化論

１．研究開始当初の背景

三浦が 2004 年夏に国際フランス語教授連合 FIPF アジア太平洋委員会委員長になったことを契機に「アジアの地域協力による非仏語圏におけるフランス語教育振興策の研究」を思い立った。

２．研究の目的

アジアの非仏語圏諸国においてフランス語教育を振興するにはどうすればいいか。これは日本とアジアの他の国々と共通の課題だと考え、研究交流しようと考えた。フランス語を母語ないし公用語とする地域、第二言語とする地域と、まったくの外国語とする地域とでは、アプローチが違っ

て当然である。非仏語圏のフランス語学習には、直接職業に直接結び付く効用的動機づけが弱く、文化的動機づけと知的動機づけが重要なファクターになる。したがって「いかに教えるか」の教育技術だけではなく「なぜフランス語を学ぶのか」の知的根拠づけを教師自身がもち、それを説得的に説明できなければならない。

３．研究の方法

フランス中心ではなく、仏語圏のペリフェリー（周辺）であるアジア諸国にみあったフランス語振興策を模索するために、研究交流を進める。フランス語で積極的に発信する機会をつくらなければならないが、フランス語で発信するにはコンテンツとメッセージがなければならない。コミュニケーションする中味はテーマ的に多岐にわたるから学際的な知識が必要になるし、たえず文化の比較、文化の対話、文化の翻訳を意識しなければならない。フランス語教育学と人文社会科学を結び付けることと、フランス語を学ぶだけではなく、フランス語で何かを研究し表現することが求められる。

４．研究成果

(1) 以上のことを自ら実践することを心がけたので、フランス語で学会発表しフランス語で論文を書く機会が増えた。扱ったテーマはフランス語教育だけでなく、地域語や移民問題やライシテなどフランス研究にかかわるものから、日本の近代史、神風特攻隊の記憶、日本の食文化などをフランスとの比較の視点から論じるものが多い。フランス研究からフランコフォニー研究、日仏比較文化論に研究領域が拡大する結果になった。

(2) 研究協力者の三人（台湾・インドネシア・ヴェトナム）はいずれも FIPF のアジア太平洋委員会のコアメンバーであり、2006 年 5 月に台北で開く第 1 回アジア太平洋地域のフランス語教育学会を準備するために、2005 年の日本フランス語教育学会に招聘してラウンドテーブルを開き、アジア・レベルでの協力の気運を盛り上げた。2010 年には第 2 回アジア太平洋地域学会があり、フランス教育振興のための地域協力は進んでいる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　19 件）

① Miura, Nobutaka, La modernisation du Japon revisitée: Que reste-t-il de l'approche moderniste?, 中央大学『仏語仏文学研究』第 42 号, pp.157-181, 2010 年（査読無）
（関連論文として,三浦信孝「日本の近代化という問題――発展段階論か文化類型論か」, 中央大学文学部『紀要　言語・文学・文化』第 105 号, pp.137-150, 2010 年（査読無））

② Miura, Nobutaka, La cuisine japonaise du dedans et du dehors, ou comment résister à la pensée carnivore ?, in Wieviorka, Michel (éd.), *Se nourir, l' alimentation en question*, Editions de l' Aube, pp.159-178, 2009.（査読有）

③ 三浦信孝「文化的多様性と多言語主義――グローバル化時代の外国語教育のために」, 中央大学文学部『紀要　言語・文学・文化』第 104 号, pp.263-284, 2009 年（査読無）

④ Miura, Nobutaka, Plaidoyer pour la langue française au Japon, 中央大学『仏語仏文学研究』第 40 号, pp.99-106, 2008 年（査読無）

⑤ Miura, Nobutaka, L'exception culturelle revisitée, l'identité française face à la mondialisation, in Wieviorka, Michel (éd.), *Peut-on encore chanter la Douce France ?*, Editions de l' Aube, pp.107-125, 2007.（査読有）

⑥ 三浦信孝「欧州憲法ノンで揺れるフランス――代表制民主主義の危機」,『日仏文化』No.73, 日仏会館, pp.122-146, 2007 年（査読有）

⑦ Miura, Nobutaka, France/Japon, allers et retours : du comparatisme co mplaisant au comparatisme critique, in Wieviorka, Michel (éd.), *Les sciences sociales en mutation*, Editions Sciences humaines, pp. 325-342, 2007（査読有）

⑧ 三浦信孝「欧州における移民問題の現状と課題――フランスを中心に」,『国際問題』No.562, pp.183-187, 2007 年（依頼原稿）

⑨ Miura, Nobutaka, 1968 et 1989 : Transformations de la France et du Japon, Regards croisés, in *Revue japonaise de didactique du français*, Vol.1, n.2, pp. 129-136, 2007 （査読有）

⑩ Miura, Nobutaka, La traduction, facteur clef de la modernisation : le cas du Japon, in *Alexandrie, métaphore de la francophonie* (actes du colloque d'Alexandrie de l'Année Internationale de la Francophonie), pp.183-187, 2007（査読有）

⑪ Miura, Nobutaka, Sur l'usage juste du mot

kamikaze : Le culte de la mort dans le Japon impérial, in Wieviorka, Michel (éd.), *Disposer de la vie, disposer de la mort*, Editions de l'Aube, pp.125-138, 2006.（査読有）

⑫ Miura, Nobutaka, La notion d'hybridité créole est-elle applicable à la civilisation japonaise ?, in Carlo A.Célius (éd.), *Situations créoles*, Québec, Editions Nota bene, pp.267-279, 2006（査読有）

⑬ Miura, Nobutaka, JAPON, in *Année Francophone Internationale 2006*, Québec, Université Laval , pp.297-298, 2006（依頼原稿）

⑭ Miura, Nobutaka, Le modèle français trois fois écarté : un aperçu de la modernisation du Japon face à la modernité occidentale, in *Revue japonaise de didactique du français*, Vol.1, n.2, pp. 79-94, 2006 （査読有）

⑮ 三浦信孝
「「記憶の権利」か「記憶の圧制」か――フランス版歴史化論争」, UP, No.406, 東京大学出版会, pp.37-43, 2006 年 8 月（依頼原稿）

⑯ Miura, Nobutaka, Le renouveau de la philosophie politique après le post-modernisme : la République contre l'Empire de la démocratie, 中央大学『仏語仏文学研究』第 38 号, pp.181-204, 2006 年（査読無）

⑰ Miura, Nobutaka, La modernisation du Japon et la France (Conférence à l'Université de Genève, les 5 et 12 janvier 2005), 中央大学文学部『紀要文学科』第 98 号, pp.381-435, 2006（査読無）

⑱ 三浦信孝「トクヴィル研究への期待」,『思想』No.979, pp.1-3, 岩波書店, 2005 年 11 月 （依頼原稿）

⑲ Miura, Nobutaka, Les politiques d'assimilation linguistiques de la République et la Francophonie , in Calvet, Louis-Jean et Griolet, Pascal (éd.), *Impérialismes linguistiques, hier et aujourd'hui*, Aix-en-Provence, Inalco/Edisud, pp.135-158, 2005. （査読有）

〔学会発表〕（計　7 件）

① Miura, Nobutaka, La cuisine japonaise du dedans et du dehors, communication présentée dans les Entretiens d'Auxerre, France, 6-8 novembre 2008.

② 三浦信孝「日本の国策としての多言語主義」, 2008/6/20, 国際フォーラム「多極的世界観の構築と外国語教育」, 京都大学。

③ Miura, Nobutaka, A propos du colloque de 1942 sur le dépassement de la modernité, 2008/03/14-15, Colloque du programme CHORUS à la Maison du Japon, Cité universitaire de Paris.

④ Miura, Nobutaka, L'exception culturelle revisitée, l'identité française face à la mondialisation, communication présenttée dans les Entretiens d' Auxerre, France, 16-18 novembre 2006.

⑤ Miura, Nobutaka, France/Japon, allers et retours : du comparatisme co mplaisant au comparatisme critique, Colloque international du CADIS : *Les sciences sociales en mutation*, Paris, 3-5 mai 2006.

⑥ Miura, Nobutaka, Sur l'usage juste du mot *kamikaze* : Le culte de la mort dans le Japon impérial, communication présentée dans les Entretiens d'Auxerre, France, 10-12 novembre 2005.

⑦ 三浦信孝「トクヴィルとライシテ・市民権――時代錯誤的問題か？」, 2005/6/10-12, トクヴィル生誕 200 年記念国際シンポジウム「フランスとアメリカ、二つのデモクラシー？」, 日仏会館。

〔図書〕（計 5 件）

① J.P.シュヴェヌマン・樋口陽一・三浦信孝『〈共和国〉はグローバル化を超えられるか』平凡社新書, 全 178ﾍﾟｰｼﾞ, 2009 年。（Ⅰ「共和国論の思想地図」, Ⅱのうち「現代世界における共和国と市民権の思想」（翻訳）,「あるナショナル共和主義者の肖像」, Ⅲ「第五共和制 50 年と〈共和国〉のゆくえ」（共著）, Ⅲのうち「共和国と文化的多様性」を分担執筆, 全体を編集。）

② 松本礼二・三浦信孝・宇野重規編『トクヴィルとデモクラシーの現在』東京大学出版会, 全 388ﾍﾟｰｼﾞ, 2009 年。（フランソワ―ズ・メロニオ「トクヴィルあるいはヨーロッパの不幸な意識」(pp.61-79)を翻訳,「トクヴィルとライシテ・市民権――ひとつの比較史的展望」(pp.333-356)を執筆。）

③ ジャン・ボベロ著, 三浦信孝・伊達聖伸訳『フランスにおける脱宗教性[ライシテ]の歴史』白水社文庫クセジュ, 全 186ﾍﾟｰｼﾞ, 2009 年。

④ 三浦信孝・松本悠子編『グローバル化と文化の横断』中央大学出版部, 全 400ﾍﾟｰｼﾞ, 2008 年。（「プロローグ――クレオール化と文化の横断」(vii-xix),「カミカゼという語の正しい使用法――皇国日本における死の称揚」(pp.75-95)を執筆。）

⑤ レジス・ドゥブレ, 樋口陽一, 三浦信孝, 水林章『思想としての共和国――日本のデモクラシーのために』みすず書房, 全 288ﾍﾟｰｼﾞ, 2006 年。（「現代世界に直面す

るメディオローグ――レジス・ドゥブレとの対話」（共著，pp.51-80），「共和国の精神について」（共著，pp.151-256），「後記Ⅰ　新『三酔人経綸問答』へのあとがき」(pp. 261-267)を執筆。）

６．研究組織

(1)研究代表者

三浦　信孝（MIURA　NBOBUTAKA）
中央大学　文学部　教授
研究者番号：１０１３５２３８

(2)研究協力者

Chi Lee, Pei-Wha, 淡江大学（台湾），フランス語教育学, FIPF アジア太平洋委員会副委員長(2004-08)

Sunendar, Dadang,　インドネシア教育大学, フランス語教育学,　FIPF アジア太平洋委員会副委員長(2004- 08) ,

Nguyen Xuan, Tu Huyen, ホーチミンヴィル教育大学（ヴェトナム），フランス語教育学, FIPF アジア太平洋委員会幹事長(2004-08)